四季おりおり

大寒桜（オオカンザクラ）

名古屋で一番早い桜

3月中旬頃、二葉館では早咲きの桜が見頃を迎えます。

淡紅色の桜は大寒桜（オオカンザクラ）、濃い紅紫色の桜は寒緋桜（カンヒザクラ）と呼ばれる種類で、染井吉野（ソメイヨシノ）より1週間ほど早く咲き始めます。年によっては3月初旬頃から咲き始める年もあります。

同じ頃、桜通線高岳駅から二葉館へと続く道でも一足早く桜を楽しむことができます。この桜並木道は毎年市内でいち早く花見ができる名所となっています。

1961年（昭和36年）の春に「名古屋で一番早く咲く桜を植えて欲しい」という地元の希望がかない、当初16本の苗木が植えられました。その後新たに植えられたものも含め、現在では約80本の大寒桜・寒緋桜が並木道を作り、早い春が楽しめます。

見頃の時期にはぜひこの並木道を通って二葉館へお越しください。

桃介ゆかりの三色桃

二葉館には福沢桃介ゆかりの三色桃が植えられています。三色桃とは1本の木から赤・白・桃色の3色の花が咲く花桃のことです。

1922年（大正11年）に桃介が商談でドイツを訪れた際、その美しさに魅せられ3本の苗を購入し、須原発電所（長野県木曽郡大桑村）の敷地内に植えたと言われています。残念ながら当時の木は残っていないそうですが、その種から育てた約200本の三色桃の苗木が関西電力により植えられているそうです。

二葉館の三色桃は、この須原発電所の三色桃の種から育てられたもので、2009年（平成21年）に5本の苗木が関西電力から寄贈されました。

また、2013年（平成25年）には、新たに二葉館の三色桃の種から育てた苗木も植えられました。

かの電力王を魅了したドイツでの美しい風景が、ここ二葉館でも見られるようになるといいですね。

文化のみち逍遥 その十

【二葉御殿跡地】

名古屋市東区白壁三丁目
1001番

貞奴と桃介が暮らした二葉御殿は、文化のみち二葉館から北西へ直線距離でおよそ500mのあたり、東二葉町（昭和55年までの地名、現在は白壁三丁目）にありました。

二葉御殿の跡地は東二葉町遺跡の中に位置しています。東二葉町遺跡は1986年に行われた1回目の発掘調査以降、これまでに4回の発掘調査が行われています。そして5回目となる今回、二葉御殿が建っていた跡地の調査が行われました。この発掘調査では、当時の建物の基礎や地下室のあと、ごみ穴などが見つかっています。掘り起こされた地下室への階段からは、当時住んでいた人たちの足音が聞こえてきそうです。

二葉御殿地下室への階段

この場所からはその他にも多くの新しい発見がされました。

古くは、縄文時代中期（いまから5000年ほど前）の竪穴式住居跡です。これまでにこの周辺で、縄文時代の明らかな住まいの跡が見つかったのは初めてのことだそうです。中には石を並べた炉の跡があり、焼けた土や炭が残っていて、縄文人の生活を感じることができました。

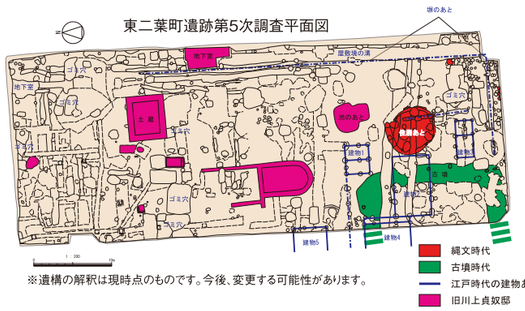
次に、古墳時代（いまから1500年ほど前）の四角い形をしたお墓（方墳）が見つかっています。古墳の本体（墳丘）は失われていたものの、周りの堀（周溝）からは、埴輪（円筒埴輪）や須恵器が出土しました。

縄文時代の竪穴式住居

それから時代はさらにめぐって、江戸時代の武家屋敷跡が見つかりました。当時の絵図面を裏付けるように、建物や塀の跡、屋敷の境目の溝の跡、ごみ捨て穴もあり、そこからは食器や鍋が出ています。

調査後は埋め戻されて、その後は建築が進められますが、もし二葉御殿跡地の付近を通られることがありましたら、その下には幾重にも歴史が埋まっていることを想像してみてください。現代の風景が違って感じるのではないでしょうか。

東二葉町遺跡第5次調査平面図



※遺構の解釈は現時点のものです。今後、変更する可能性があります。

株式会社パスコ
東二葉町遺跡　第5次発掘調査
現地説明会資料から一部転載

大正モダニズム建築の粋を見る ⑧

旧支那室

二葉館の2階には支那室という中国風の小部屋があります。ラーメンの器でおなじみの『雷文』という渦巻き状の文様が床板にはめ込まれ、白を基調とした部屋にはエンジ色の中国風の模様があしらわれています。『支那』とは昔日本で使われていた中国に対する呼称です。大正から昭和初期にかけて、中国風の部屋『支那室』を作ることが上流から中流階級では流行したそうです。現在の支那室の外観は古写真から再現され、記録がなかった内部に関しては揚輝荘（名古屋市千種区法王町）の中国様式の部屋を参考に再現されました。

ヨーロッパでは17～18世紀頃、シノワズリ（フランス語で中国趣味）が流行し、東洋の題材を取り上げた芸術作品や中国の様式を真似た建物や家具、食器などが多く作られました。その頃の中国風の部屋や調度品は今でもヨーロッパの宮殿で見ることができます。

さて、川上音二郎・貞奴一座は1900年にヨーロッパへ渡りました。同年のパリ万国博覧会で絶大な人気を博した貞奴は、フランス政府から『オフィシェ・ド・アカデミー』を受賞しています。一座はヨーロッパを広く巡業し、そのエキゾチックな魅力で人々を虜にし、川上夫妻は各国の王族や権力者からパーティーに招かれることもありました。その招かれた煌びやかな宮殿の中にも、中国風の部屋や調度品があったことでしょう。

日本でも古くから中国や韓国の舶来品がもてはやされ、書院や床の間の飾り、茶道の道具として大切にされてきました。家屋敷に支那室を設けるのはその流れなのかもしれません。しかし国際的な女優である貞奴を考えてみたとき、支那室の設置は単なるブームや日本古来の中国趣味ではなく、西洋の宮殿との出会いがきっかけになった可能性もゼロではないと思います。もちろん本人に聞くすべはありませんが、そう想像すると楽しくはないでしょうか。

書庫棟から

二葉館の2階でお客さまの応対をしていると、窓から見える書庫棟を指して「あの建物は何ですか？あの中も見られるの？」と時々聞かれます。書籍・資料の保管のため、残念ながら一般公開をしていない場所なので、通常は中をご覧いただくことはできません。お客さまには書庫について簡単に説明しています。

書庫棟には書籍以外にも、作家にまつわる資料がたくさん保存されています。資料といっても作家によって様々ありますが、一部をご紹介しましょう。

直筆原稿…作家ご本人による直筆の原稿。
放送台本・映像…ドラマや演劇の台本や講座番組の台本。放送の記録ビデオ。
スクラップ…新聞・雑誌記事の切り抜き。

写真…出版物掲載の写真、対談や取材時の写真、プライベートのアルバム。
書簡…挨拶状や出版社との打ち合わせなど公的なものから、知人友人からの手紙やはがき電報。そのほか、FAXやコピーなど。
雑記帳…取材時の記録や構想が書きとめられたノートやメモ、日記など。
模型…作品の題材やイメージに用いたと思われる、ゼロ戦のプラモデル他。
趣味の道具…絵の道具やスケッチブック、レコードやCD・ビデオなど。
コレクション…趣味で集められたグラスや置物・絵画、ご自身の直筆も含めた書など。
文房具…実際に使っていたと思われる筆記用具や道具。
日用雑貨…日常で使われていた時計など雑貨や医薬品等。
賞状や賞品…文学賞やその他。

資料の一部は、2階展示室の常設コーナーでご覧いただけます。その他は企画展等で関係資料の展示を行いますのでどうぞご覧ください。